

海を渡ったキモノから「染織の日本」を再発見する 衣生活学習の開発

高橋美与子 柴 静子 日浦美智代 一ノ瀬孝恵
佐藤 敦子 高田 宏

はじめに

昨年度は本プロジェクト資金を得て、「モードのジャポニズムを通して日本の布と着物のちからを発見する衣生活領域の授業開発」(『学部・附属学校共同研究紀要』第41号, 2013) という論題で、日本の伝統と文化を見出させる衣生活学習を「家庭基礎」において開発し、実践・評価した。アンケート調査等を通して、この学習の開発が適切であり、効果が多大であったことが証明されたが、次の点が研究課題として残された。

①明治期に西欧に渡り、日本文化への熱烈な興味と理解をもたらすことになった幕末の小袖や打掛、明治期に椎野正兵衛商店等から輸出され、外貨を得てわが国の近代化を担った「キモノ風ガウン」など、意味ある衣装に実際に触れさせることによって、世界に誇る日本の服飾文化やものづくりの精神をより多角的に生徒に再発見させることができるのではなかろうか、②実物衣装とその他の教材(映像, 図録, ファッショントランプ等)を組み合わせることによって、海を渡って西洋に迎え入れられた日本の染織品の価値について、グローバルな視点からより深く理解させることが可能になるのではなかろうか、という2点である。

そこで本年度の研究においては、昨年度の成果と課題を踏まえて、実物衣装の観察と考察、及び椎野正兵衛の「ものづくりの精神」への理解という2つを取り入れた授業を開発し、実践・評価して、普及可能な学習モデルとして提案することを目的とした。

具体的には、附属福山高等学校の「家庭基礎」において、「海を渡ったキモノから『染織の日本』を再発見する実験授業」を行い、各種調査を通して評価し、修正して、授業モデルを作成することを計画した。教材としては、大学の人間生活教育原論研究室がアメリカ、

イギリスから取り寄せた江戸・明治期の刺繍着物や着物風ガウン、京都服飾文化研究財団主催のモードのジャポニズム展の図録¹⁾、ボストン美術館所蔵キモノ展の図録「Kimono Beauty」²⁾、映像資料、参考図書等を使用する。授業では実物衣装とこれらの資料を組み込んで学習内容を豊かにし、江戸から明治へと続いた、世界に誇るわが国の染織の技やものづくりの精神について発見的に探究させ、伝統と文化を深く理解させるとともに、これを基盤として現代の衣生活についてクリティカルシンキングさせることをねらった。

1. 海を渡ったキモノから『染織の日本』を再発見する衣生活学習の開発と授業実践

「海を渡ったキモノから『染織の日本』を再発見する衣生活学習」の授業実践は、2013年11月8日～12月13日の7時間をかけて、附属福山高等学校で実施した。授業者は高橋美与子教諭であり、1年生の1クラス、計40人(男子18人, 女子22人)を対象とした。

(1) 本授業の評価規準と指導計画

授業の評価規準と指導計画は、次の通りであった。

(i) 評価基準

(ア) 関心・意欲・態度について

着物のデザイン・構成・歴史などに関心を持って学習し、様々な視点からその歴史的価値を見出し、学習したことを基にして自分の衣生活を振り返り、その改善に役立てていこうとする。

(イ) 思考・判断・表現について

着物に関する様々な情報を通して自分の生活をクリティカルシンキングすることができる。また、課題のまとめやグループ内での話し合いの場でわかりやすい

表現ができるように工夫できる。

(ウ) 技能について

作り手とそれを使う人たちの気持ちを通じ合う手作り・もの作りの精神を理解し、実際に布を用いた小物をつくり、家族や周囲の人たちとの交流に活かすことができる。

(エ) 知識・理解について

着物にまつわる絹織物・刺繍また世界へ及ぼした影響などの歴史的的事実に関する知識を理解している。

(ii) 指導計画

7時間の学習指導を次のように計画し、実践した。

- ①欧米のファッションへの着物の影響・・・1時間
- ②明治時代に欧米に輸出されたキモノ・・・1時間
- ③着物の疑問点についての調査、発表・・・2時間
- ④絹物商椎野正兵衛のものづくり精神・・・1時間
- ⑤絹織物に施された日本刺繍について・・・1時間
- ⑥現代生活との関わりについて・・・1時間

(2) 指導内容及び生徒の気づきや感想等

指導計画の①～⑥(計7時間)に示した授業の概要は以下の通りである。

(ア)「指導計画①の1時間」の概要

18世紀から19世紀にかけて欧米の女性用のドレスのデザインが大きく変化したことを理解させた。

Ⓐ ヴィクトリア&アルバート博物館所蔵の衣装を写真にしたランプおよび変化前後の特徴を示している実物を見せることで、20世紀初頭の西欧において衣装のデザインが大きく変化したことに気づかせた。

Ⓑ コルセットでウエストを締め付けて着用する窮屈なドレスから、ゆったりと肩から流れ落ちるようなドレスへと変化していく過程で、大きな影響を及ぼしたのが日本の着物であったことを発見させた。

(イ)「指導計画②の1時間」の概要

明治時代に日本から欧米に輸出されたキモノ風ガウンの実物を各班に1枚ずつ配り、観察させた。その中には着物を基にして作られていてその構成を残したものと、身頃や袖付けの構成などが洋服のデザインで作られたものがある。観察を通しての感想や、各衣装について出てきた疑問点をまとめさせた。

図1は、各班に割り当てられた衣装10点のうちの8点の写真である。これらは全てアメリカとイギリスから収集したものであり、精緻な日本刺繍が施されている。各々の説明は柴の論稿³⁾を参照されたい。

以下は、ワークシートに記された生徒の観察・感想と疑問点である。()内の番号は、図1の各衣装(キ

モノ風ガウン)の番号と対応している。

(観察と感想に関わる記述)

(i) デザインに関して

- ・鳥や葉の色彩が細かく表現してあり、場所によってグラデーションになっていてとても綺麗だ。(③⑥⑧の衣装)
- ・前と後ろの両方に模様がぎっしりあって色合いも鮮やか。どちらかと言えば後ろの方が華やかになっている。

(⑤の衣装)

- ・刺繍以外にも糸で作ってある飾りがつけてあって華やかさを増している。(⑤の衣装)

- ・鶴や雀の刺繍が和という感じがする。(⑧の衣装)

- ・一般的に着物と言われて想像するような着物ではなくて、はんでんみだ。襟もボタンもポケットもある。中国っぽい。(②の衣装)

(ii) 刺繍に関して

- ・刺繍がすごい。細かくて日本の技術のすごさを感じた。職人の腕の良さを感じた。(④⑤⑥の衣装)

- ・刺繍が立体的で、全て刺繍で模様がつけてあって、そこがすごいと思う。(③⑦の衣装)

- ・刺繍の方法が模様によってそれぞれ異なっている。

(③の衣装)

- ・洋服っぽいけど、刺繍の模様は桜で和風な感じがする。

(②④の衣装)

(iii) その他、手触りなどに関して

- ・裏地がついていてツルツルしていて着やすそう。

(⑤の衣装)

- ・袖口や裾の方に綿が入ってあって傷みやすい部分の強度を考えている。すごいと思った。これなら長く着られそう。

(⑧の衣装)

- ・手触りがよく軽くてゆったりとしている。着心地が良さそう。

(①②④の衣装)

- ・膝にかけると暖かく保温性がある。(③の衣装)

- ・直線で切って縫ってあって実際に作るの大変だと思うけど、洋服より簡単そう。

(⑧の衣装)

(疑問点に関わる記述)

- ・一体これは何なのか。着物なのだろうか、何の衣装なのか(①②④の衣装について)

- ・いつの時代にどこの国でどんな人がどんなときに着ていたのか。(⑦の衣装について)

- ・着用ではなくて観賞用なのか。(④の衣装について)

- ・糸は絹だろうか。生地は何か。(⑥の衣装について)

- ・刺繍するのにどの位時間がかかるのか。

(③⑤⑦の衣装について)

- ・自然や花の刺繍が多いのはなぜか。(⑤の衣装について)



図1 明治期に欧米に輸出されたキモノ風ガウン

(ウ)「指導計画③の計2時間」の概要

ビデオ「ファッションデザインのジャポニズム①」(1994年5月24日, NHK教育)を視聴させた。各班に配布した「モードのジャポニズム展(東京)」の図録とボストン美術館の所蔵品が含まれている図録「Kimono Beauty」の中から、観察対象であるキモノ風ガウンと似ている衣装を見つけさせ、グループで話し合いながら疑問点を解明するように指導した。

キモノが初めて外国に渡ったのはいつで、どういった理由からなのか、その後、キモノは欧米の人たちにどのように受け入れられていったのか等の疑問の解決をこの2種類の資料から図った。

以下のようなワークシートの記述から、生徒が、ビデオ視聴や実物の観察を通して、キモノ風ガウンについてどのような発見をしたのかを知ることができる。

(i)ガウンの形に関して

- 1904～1908年頃の室内着である。日本から欧米に向けて輸出されたキモノ風室内着。腰に膨らみを持たせたドレスの上からでも羽織れるように身頃は完全な直線裁ちではなく、裾に向かって緩やかに広がり、襟もカーブし、着物の本来の形を生かしながらも西歐向きにするように裁断に配慮がみられる。優雅で着やすく着心地が良い。軽くゆとりがある。

(⑥の衣装について)

(ii) もとになっている着物との比較

- ・17世紀末期、武家女性や町人の女性に流行した着物を基にしている。桜や梅・橘・椿などの樹木をモチーフとして、特に屈曲しながら裾から下方に向かって立ち上がる幹が特徴の「立木模様」が見られる。(⑤の衣装について)

(iii) 椎野商店の製品に似たガウン

- ・19世紀後半「椎野正兵衛」が推した日本製のガウンのようだ。「モードのジャポニズム」の図録にそっくりなガウンが出ていた。明治時代、日本で作られ輸出されたガウンと思われる。外国では室内着として着られていた。袖の構成は2枚袖、袖付け位置が低く、当時流行の丸みのある肩線、後ろ身頃は腰を強調してボリュームを出している。中綿をたっぷり詰めることで保温性を高め、その厚みをつぶさないために、柔らかく手刺しで仕上げている。日本製だが外国の人が着やすいように作っている。

(②の衣装について)

(エ) 「指導計画④の1時間」の概要

「ファッションデザインのジャポニズム①」のビデオやモードのジャポニズム展の図録に登場しており、既に幕末にはガウンを西欧に輸出していた「初代・椎野正兵衛」とは一体どういった人物だったのか。生徒に、正兵衛に関する疑問をもたせ、彼のものづくりの精神を理解させることにした。正兵衛の衣装製作への思いや、同商店4代目の秀聰氏が初代のデザインを生かしてスカーフなどの絹製品を復元製作している意義について知らせるために、同店のプロモーション・ビデオ「150年の時を超えて蘇るジャポニズムの先駆け S.SHOBAY」を視聴させた。

正兵衛の生き方の中で、特に生徒に示したい「ものづくりの精神」と日本の伝統的な技の結集である「刺繍」が施された「明治期の輸出用絹織物」の価値について、次の2点の質問に答える形で考えさせ、記述させた後に発表させた。

① 自分が日本製のガウンを売り出すとしたら、どのようにその魅力をアピールするか。

② 正兵衛は、どうして世界の人々を魅了する素晴らしいガウンを作ることができたのだろうか。

以下は、①と②について、生徒がワークシートに記述した内容を理解の程度に応じて分類したものである。

(i) 絹織物や刺繍の価値を認識することができていて、それに基づいてガウンの魅力を考えている記述

- ・こちらのガウンをご覧のご婦人方、あなた方はお目が高い！これは19世紀後半に西洋の女性向けに作られた日本製のガウン。あのエキゾチックジャパンのガウンですぞ。

ご覧ください、この優美な刺繍。一見ただのベージュのキルティング生地に見えますが、よく見るとこの大人の雰囲気漂う刺繍があしらわれておるのです。注目すべきは刺繍だけじゃないこのキルティング！職人の手により一針一針丁寧に縫いこまれた、これは中の綿がつぶれるのを防ぎ、保温性に優れています。そして日本の誇る絹織物技術。これを羽織れば絹のつややかな柔らかさがあなたを包み込んでくれるに違いない。(②の衣装について)

- ・この衣装は、日本の質の高い絹を使用していて、手触りが良く、光沢も美しいです。全体に散りばめられた草花や鳥の刺繍は一つひとつ細やかで和風な雰囲気を作り出しています。その一方で、後ろ身頃の部分の縫い方が工夫されており、下方に向かって広がるような洋風なシルエットを取り入れてあります。さらに、袖口が小さめに作られていたり、袖と身頃の縫い付け部分の下の方があえて縫われていないことで、動きやすさなどの着心地にまで配慮されています。(⑧の衣装について)

(ii) ⑥について考えることで、椎野正兵衛の「ものづくりの精神」について、様々な観点から理解を深めていくことができている記述

- ・「和魂洋才」で着物を作ったので、世界の人が着物にとつきやすく着物の良さをすぐに伝えることができた。また、莫大な資産を染織工芸につぎ込むほど服というものを愛し、大切に思っていた。その心がガウンの品質やデザインを高めること、尽くすことに影響して素晴らしいガウンを作ったのだろう。
- ・洋服は人間が進化するうえで発明してきた言わば世界の文化。だから正兵衛はその洋服を通じて世界とつながりたかったのだと思う。それが彼の原動力になったのではないだろうか。
- ・椎野さんは日本を愛していたのでしょうか。日本の文化・着物の素晴らしさをどうしても伝えたくかった。だから素晴らしいガウンを作ることができた。絹の肌触りの良さ、手刺繍、手作り、これらからも愛が感じられるのではないのでしょうか。あとは「はくぎん」の活躍です。「はくぎん」がいたから上質な製品を作ることができました。唯一無二の着物文化と蚕が(それと愛)世界の人々の心を虜にしたのです。
- ・正兵衛は独自のデザインの衣装を作り世界の人々を魅了した。見た目が美しく優美なのは当然だが、それだけではなく、着心地や保温性なども気にして衣装を作っていたことが窺える。
- ・服の生地選びから人の着心地の良いものを探すという努力を惜しむことなくやっていたから。日本の文化を主張するばかりではなく、相手の文化も取り入れた独創的な物を作ったから。相手の国の美意識やファッションに合わせて

着やすいものを作ることができたから。

(iii)⑥について、「ものづくりの精神」に触れてはいるが深まりが見られない記述

- ・国を強くするという強い意志と努力の御蔭。日本の伝統技術を西洋に理解してもらうために修整を加えたから。
- ・うまく高級感を生み出し、ブランド化に成功したから。
- ・(ラベルなど) 政府の支援があったから。
- ・日本は昔から絹製品を扱ってきたりして、古くから育んできた技術は日本の心を表現するのにぴったりだったから。
- ・積極的に新しいことや他のいいところを取り入れようとしたから。
- ・手がこんだ作品を作ったから。一目で日本らしさが伝わりかつ見る人を感動させるような素晴らしいデザインだったからだろう。
- ・もの作りへの誠実な心があったから。消費者の気持ちになって世界の人々がどう思うかをしっかり考えて作ったから。
- ・欧米の人をしっかりと観察したから。もしかすると正兵衛自身が欲しかったのかも。日本の職人の技術はすごいと思っていて着物だけではもったいないと思ったから。
- ・商人として良い製品を生み出したい、売りたいという思いがあったから。

(オ)「指導計画⑤の1時間」の概要

これまでの学習から「ものづくりの精神」について、作り手と使い手の気持ちが通い合うことでものに心が宿り、質の高いものに仕上がっていくということを、生徒は感じ取っている。しかし自分の生活と関連付けることは容易でない。そこで一人ひとりが「ものづくりの精神」を自分のこととして捉えることができるように、ビデオ「美の壺・刺繍」(2010年6月4日、NHK教育)を視聴させた。この番組では、日本刺繍の歴史、繡いの多様な技術と装飾性などといった奥の深さとともに、家族や身近な人のために一針一針縫うと思いがこもる、だから美しいし、不思議な力が宿る、ということが表現されている。

ビデオ視聴を通して、手作りのものをプレゼントしたりされたりしたときの気持ちを思い出すことができ、ものには気持ちが宿るということを実感させたいと考えた。

(カ)「指導計画⑥の1時間」の概要

ここまでの学習で、生徒たちは、従前の着物のイメージから抜け出し、明治期に輸出されて人々を魅了したキモノ風ガウンの力や正兵衛の考え方を知って、日本を支えてきた、ものづくりの技術と至上の製品をつくるという精神の重要性を理解することができた。

一連の授業の最終段階では、自分たちの生活を振り返り、改善・向上させていくために、椎野正兵衛の「ものづくりの精神」を現代の生活のどのような点に活かせるかを考えさせた。

下記は、今回の学習と自分たちの生活との関連について、ワークシートに書かれた内容を抜粋し、分類したものである。

(i)消費社会に対する警鐘

- ・現代の使い捨ての世の中への啓発。
- ・ものを大切に使うこと。
- ・資源を大切にすること。

(ii)和魂洋才の精神をもつこと

- ・日本が誇れるものを世界に伝える。
- ・日本の文化を大切にしながら今の生活にあったものを取り入れていく。

(iii)世界への発展について

- ・世界に挑戦する。
- ・世界に関心を持ち、良いところは吸収する。
- ・相手の国の文化に合わせること。

(iv)衣服の作り手と使い手の繋がりについて

- ・人々のために思って便利かつ安全につくること。
- ・大量生産になって技術の向上だけを目指すのではなく、使い手が作り手の気持ちを感じ取れるようなものづくりが大切である。
- ・お金のために作るのではなく、伝えたい・届けたいという思いの方が大切。
- ・デザインなどのように見てすぐわかるところだけにこだわるのではなく、基本の生地を作るところから大切に、より良いものを目指す。
- ・ものにこもっている作り手の愛情をしっかり理解して大切に使うこと。
- ・買うのもいいが、愛情のこもった刺繍や手作りの服の重要性を見直すこと。
- ・ものを作るときには相手の心をぐっとつかむように、より良いものを目指して作ること。

(3)教師による授業後の省察

本研究では、昨年度の学部・附属学校共同研究を発展させ、明治期の輸出用キモノを取り上げることによって、衣生活における日本の伝統と文化の学習を開発することをねらった。実物衣装を中心として、関連の映像、展覧会の図録やV&Aのコスチューム・トランプなどの豊富な資料を用いて、クリティカル・シンキングに配慮した、発見的な衣生活の授業をデザインし、実践した。以下は、今回の実践を遂行した高橋美与子教諭による授業についての省察である。

(ア) 着物のイメージの変化について

「モードのジャポニズム」を取り上げて、海を渡り、世界のファッションに貢献したキモノという観点で学習することで、生徒の今までの日本固有の古めかしい衣服という着物のイメージを大きく変えた。また、直線裁ちであるため資源としての活用方法も多様化するということにも触れたことで、生徒にとっては発見の多い学習内容になった。「今日、家庭科では着物の勉強をした。昔日本の着物が西洋の服（ドレス）に影響していたことがわかってびっくりした。日本の和のものはいいなと思った。」という記述が、授業日の学級日誌にも登場した。

(イ) 日本刺繍の魅力について

授業者が予想していた以上に、生徒は刺繍に惹きつけられていた。これは明治期に欧米に輸出されたキモノ風ガウンの実物を手にしながら学習することができた効果といえる。ガウンに施された刺繍から、立体感や絹糸の微妙な色使いを直接目にすることができたり、一針一針の手触りや暖かみを肌で感じ取ることができたりしたことで、その素晴らしさを実感することができたようである。ガウンを見ただけで、何の説明も受けない授業当初の感想文にも、刺繍について既に本質をついた感想を書いているものが少なからずあった。

今回の授業実践で対象としたクラスは、保育園訪問のために刺繍付きの名札を手作りした経験をもっているため、今回のキモノ風ガウンのような見事な刺繍が出来上がるまでの大変さや、出来上がりの美しさに対して、より強く感じるものがあつたように思える。さらにはNHK番組『美の壺 刺繍』は秀逸であり、刺繍の歴史や技術面、また色に関する様々な知識を得ることができ、理解をより深めることができた。生徒の感想には、自分も刺繍をしてみたいというものが多く見られた。

(ウ) 椎野正兵衛の「ものづくりの精神」について

キモノ風ガウンについて調べる過程で、生徒たちは椎野正兵衛という人物に出会うことになる。彼がどんな人物だったのかを知らせるために、椎野秀聡・青山弦著「S.SHOBAY」中のものづくりの精神につながる次のような文章を取り上げた。

「ものとは、人の暮らし、心を豊かにするための道具だ。ものに命は宿っていないが、つくり手と使い手がものを間に交流するとき、つくり手が使い手の声に真摯に耳を傾けてつくるとき、ものは内側から光を放つ。その光は時代を超え、国境を越えて、人の心を温かく照らしてくれる。ものづくりの精神は、世代から世代へと受け継がれていくべきものだ。伝えていくべ

きは、技能の伝承以前に、ものづくりにたずさわる人の拠りどころとなる精神、理念である⁴⁾。」

今回の授業を計画するにあたって、生徒が自分の生活にも活かしたい、生活を変化させたいと考える契機を与えたいと思った。そのためには、知識や技術を身に付けさせるだけでは不十分であり、強烈に気持ちに訴えかけるものが必要だと考えた。椎野正兵衛の「ものづくりの精神」には、そのような力が秘められていると思われた。正兵衛が生徒の心に訴えかけたものは、「ものづくりへの誠実さ、気持ちをこめて作った商品を通しての人と人との繋がり」ということだった。

生徒たちは、正兵衛の「ものづくりの精神」を受け止めて、商品に心が宿らない消費社会（使い捨て社会）の虚しさを実感することになった。

(エ) 授業から広がる世界

今回の授業を設計する以前の問題意識は、着物離れの生徒たちに何とかその良さを見直してほしい、様々な分野での着物の力を理解し、使い捨ての自分の衣生活を改善することに役立ててほしいという、比較的単純なことだった。だが、研究を進めていく過程で、「海を渡ったキモノ」という歴史的、経済的そして文化的に想像を絶する圧倒的な力をもった「衣装」が存在したことが明らかになってきた。今回の授業は、その圧倒的存在を可視化し、現代の衣生活を考えに生かす手立てとしたものといえる。

「今回の学習を通してこれからの生活を考える」というテーマで生徒が書いた文章から、伝統文化を大切にしたいとか、資源の有効活用を実行していきたいといった内容に留まらず、意外な広がりや深まりを感じた。以下は、そのような記述である。

今、世界はグローバル化しています。そんな中で大切なのは正兵衛さんの自国と他国の文化を認め合い、自国を主張し過ぎず、上手く世界とつながっていくことだと思います。グローバル化に伴って、商品の価格競争に勝てなくなって、日本の着物だけではなく、農業もそうですが、他の国も含め世界中沢山の国で伝統文化・技術が失われているのではないかと思います。大量生産・低価格化が可能になった今だからこそ、世界とつながることももう一度自国・他国の美しい伝統を再確認すべきだと思います。私も授業で初めて知ったことも多かったですし、もう一度着物の良さを伝えればまだまだ人気が出ると思います。とは言え生活する上では、低価格・便利さは、はずせません。個人ではどうにもできないこともあります。じゃ何ができるのか、と考えたときに家族への愛情ということが浮かびます。家族を大切にしたいと改めて思いました。子どもにはちゃんと着物の話とか、失われつつある日本の素晴らしい伝統技術を教えてあげた

いです。私の家だけかもしれませんが、親世代は日本文化に詳しくないと感じます。何か聞くとおばあちゃんに聞いてみなさいと言われる。親世代がここまで詳しくないのは親たちが子どもの頃の社会の影響かなと思います。だから私は今のうちに祖父母から話を聞いてそれを自分の子どもに伝えていきたいです。授業で見たビデオの内容も覚えていたら伝えたいです。着物は持ってないけど着てみたいです。老後は着物で、と思います。

この生徒は、グローバルな視点から家族のあり方についてまで広く考えている。小学校5年生から始まった家庭科の学習は今年度で終了する。生徒たちの文章を読むと、今回の授業はこれまでの家庭科学習の総まとめにもなったのではないかと、思われる。これから彼らが自立していかなくてはいけない社会は、様々な点で今まで以上に困難な状況になっていることが予測できる。そのような中で、家庭科は、人間として大切な考え方を身につけさせることのできる教科であり、

そして生徒たちが希望をもって社会に出て行くための生活実践力を習得させることが可能な教科である。加えて今回の実践から、文化的学習を通して現在と未来を豊かに生きる力を獲得させる意義深い教科である、と再認識した。

2. アンケート調査に見られる授業の効果

今回の授業の効果について、生徒のワークシートの記述や教師の授業後の省察に基づいて見てきた。加えて本研究では、一連の授業の直前と直後にキモノについての価値観や認識を測るためのアンケート調査を実施し、さらに最後の授業では、それまでの学習内容についての興味や理解を測るアンケート調査を実施しているので、次に述べる。

表1は後者の結果を示したものである。質問項目の1, 3, 8, 9, 10は、今回の授業を成立させる教材として、必要不可欠な3本の映像に関するものである。

表1 学習内容に対する興味と理解

質問項目	強い肯定	やや肯定	どちらとも いえない	やや否定	強い否定
1 NHK番組『ファッションデザインのジャポニスム』に興味をもつことができたか	13 (32.5)	20 (50.0)	3 (7.5)	3 (7.5)	1 (2.5)
2 欧米でコルセット付きの窮屈な衣装がゆとりある衣装に変化した際にキモノの影響があったことが理解できたか	30 (75.0)	9 (22.5)	0	1 (2.5)	0
3 NHK番組『美の壺・刺繍』の視聴により、日本刺繍の歴史を理解することができたか	22 (55.0)	16 (40.0)	1 (2.5)	1 (2.5)	0
4 キモノの刺繍を見て心を込めてものを作ることが人間にとって大切であることを認識したか	24 (60.0)	12 (30.0)	2 (5.0)	2 (5.0)	0
5 明治期の輸出用絹製品に、なぜ刺繍がなされていたのか、理解することができたか	17 (43.6)	15 (38.5)	2 (5.1)	5 (12.8)	0
6 今回の授業を通して、キモノの持つ「ちから」に対して敬意の念をもつようになったか	26 (65.0)	10 (25.0)	3 (7.5)	1 (2.5)	0
7 今回の学習から、自分も針と糸を持って生活を豊かにする布製品を作りたいと思うようになったか	13 (32.5)	18 (45.0)	5 (12.5)	3 (7.5)	1 (2.5)
8 椎野正兵衛のビデオ視聴から、日本の絹や絹製品の素晴らしさについて理解できたか	20 (50.0)	16 (40.0)	3 (7.5)	1 (2.5)	0
9 椎野正兵衛のビデオ視聴や学習から、明治時代の絹製品の欧米での魅力について理解したか	24 (60.0)	14 (35.0)	1 (2.5)	1 (2.5)	0
10 ビデオ視聴や学習を通して正兵衛の『ものづくりの精神』について理解することができたか	26 (65.0)	11 (27.5)	2 (5.0)	1 (2.5)	0
11 正兵衛の『ものづくりの精神』を現代の生活に生かしていく必要があると思うか	24 (60.0)	11 (27.5)	5 (12.5)	0	0

(注：上段は人数，下段は%を示している。)

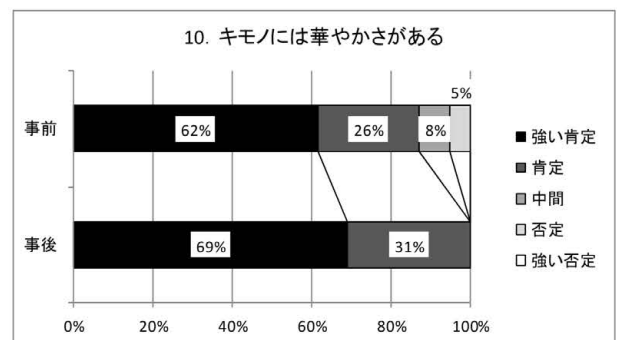
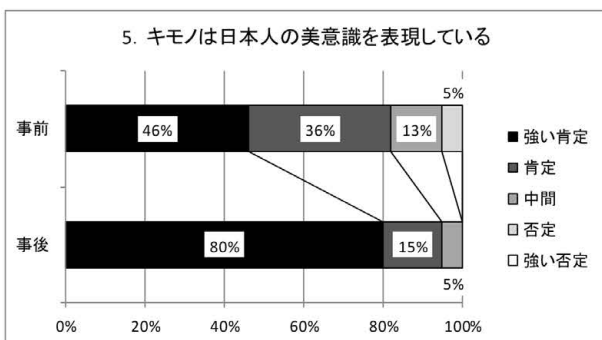
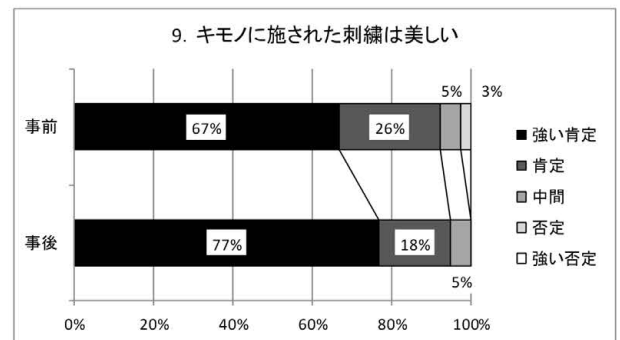
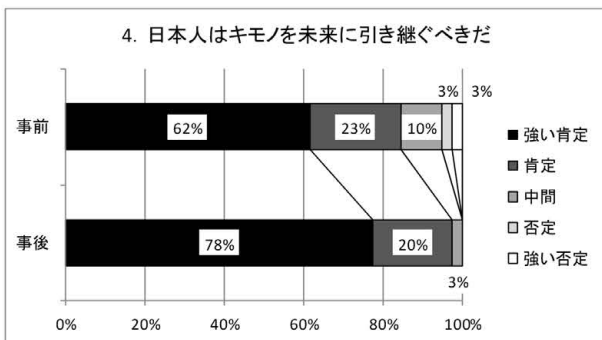
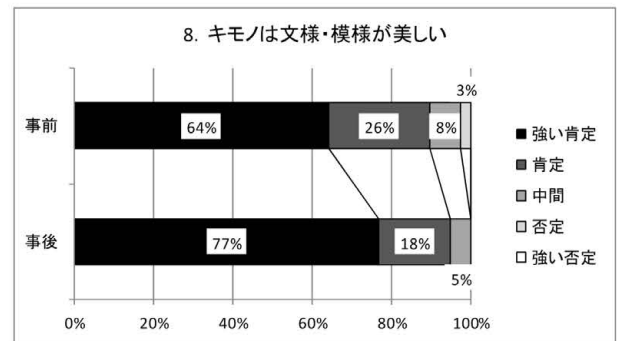
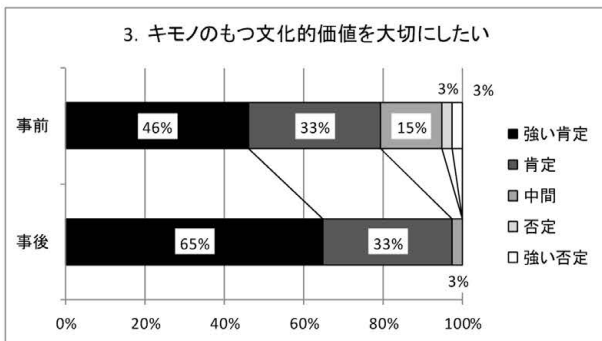
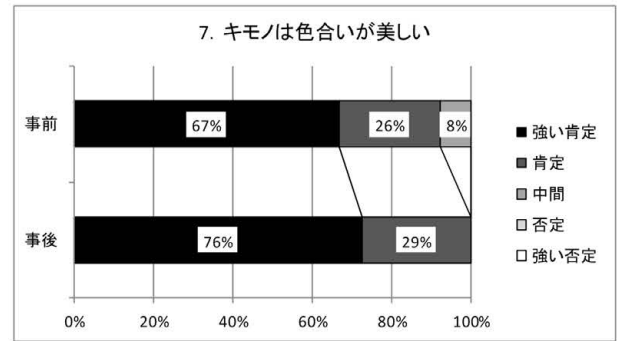
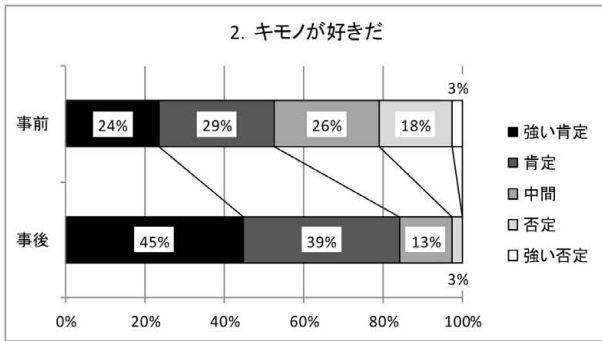
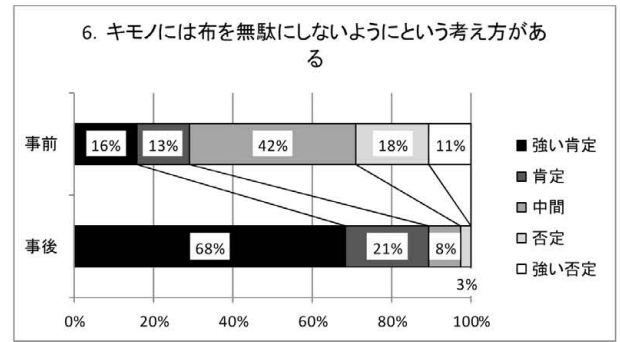
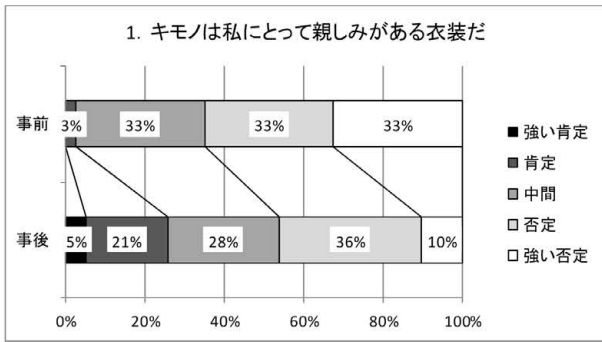


図2 授業の事前と事後の意識の変化(1)

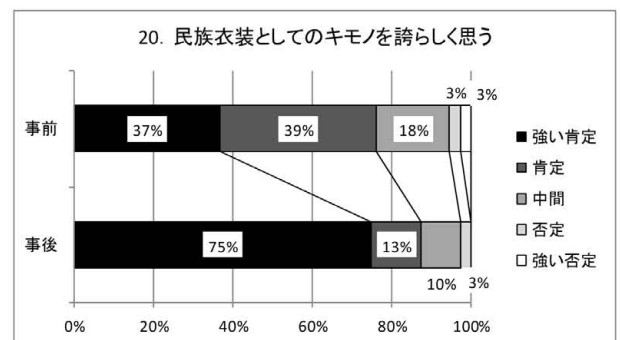
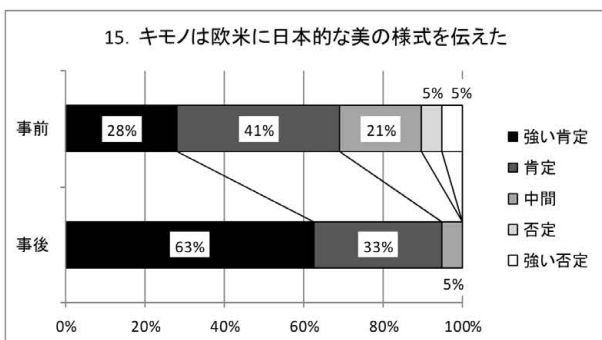
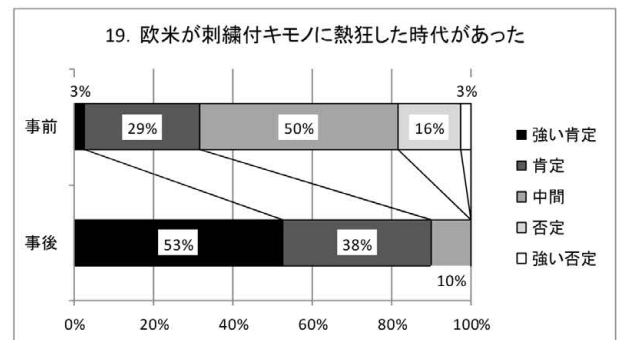
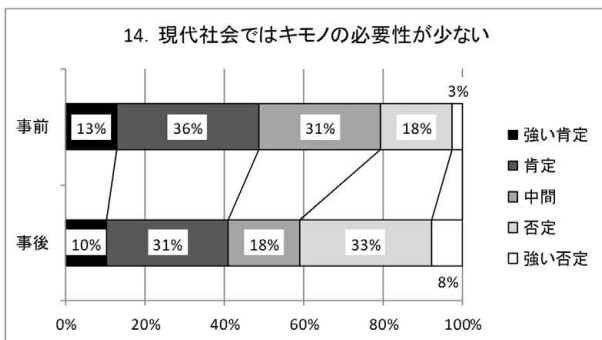
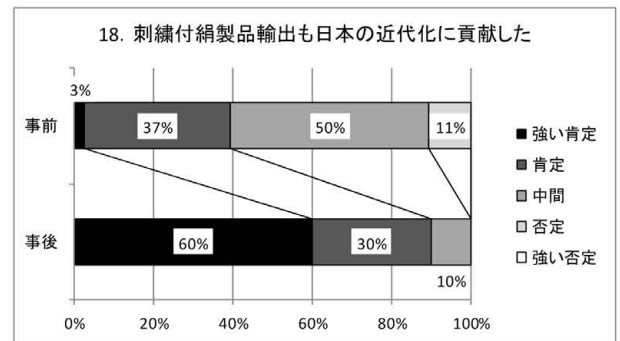
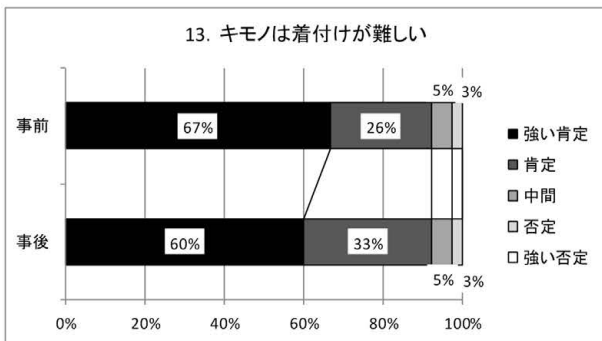
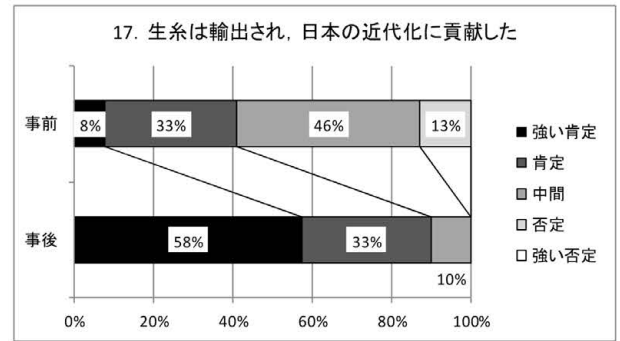
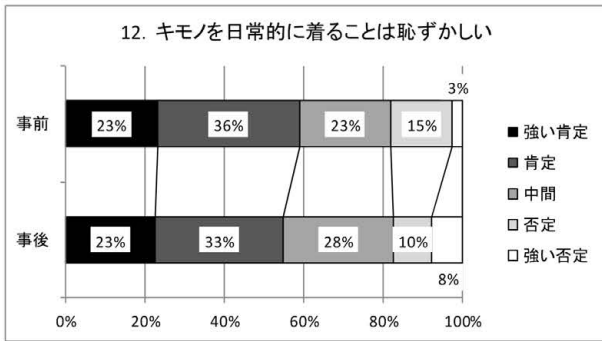
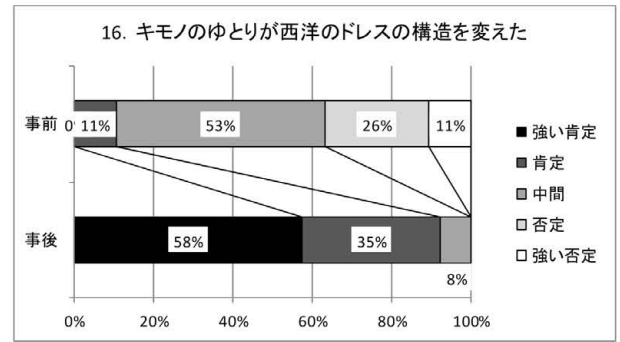
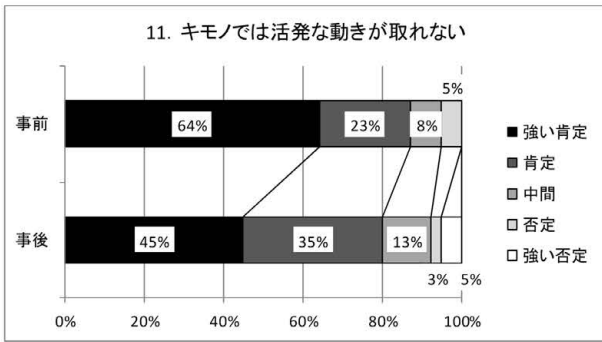


図2 授業の事前と事後の意識の変化(2)

生徒は、明治期に欧米で巻き起こったジャポニズムをファッションの側面から明らかにした映像『ファッションデザインのジャポニズム①』の視聴を通して、キモノが洋服の構造までも変える影響力を有していたことを理解した。この映像に興味をもったどうかを尋ねたのが質問1であり、8割以上(82.5%)の生徒が肯定していた。また、このような興味深い映像の視聴によって、97.5%というほぼ全員の生徒が、近代服の源流を作ることに参画したキモノの力について理解した、と答えている。

1873年にウィーンで開催された万国博覧会には、横浜の椎野正兵衛が絹物商として派遣され、万博会場の出展物調査や現地視察の結果、絹地に日本刺繍を施した衣装やハンカチなどの輸出が外貨獲得のための確かな方途であることを見出してきた。質問8, 9, 10は、既に幕末から西洋人用ガウンを製作していた正兵衛のものづくりの精神や、正兵衛のみならず明治の日本人が製作した絹物の秀逸さについて、映像や図録を使用した学習などから理解できたかどうかを尋ねたものである。質問項目中の「椎野正兵衛のビデオ」というのは、映像「150年の時を超えて蘇るジャポニズムの先駆け S.SHOBHEY」のことである。この映像の内容が感動的で優れていること、「モードのジャポニズム」の図録に示された正兵衛のガウンが魅力的であること、そして正兵衛のガウンに似た実物衣装を手にとって観察したことなどから、質問8, 9, 10に関して肯定した生徒は、それぞれ、90%, 95%, 92%と極めて高い割合となった。

今回、各班の生徒が観察や考察の対象とした10着の衣装全てに、精緻で豪華な日本刺繍が施されている。海外に輸出する絹製品に、日本的なモチーフの刺繍を高度な技で施すことによって、欧米のそれらよりも質の高いものを作り出そうとした正兵衛の決意の背景には、江戸から続く日本刺繍の優れた技をもつ刺繍職人集団の存在があった。質問3, 4は、そのような刺繍の歴史と精神について、理解できたかどうかを尋ねたものである。前者は95%, 後者は90%の生徒が理解できたと答えている。ただし、明治期の輸出用絹製品になぜ刺繍が施されているのかを理解した生徒は、82%とやや低い数値になっている。

今回の学習から、質問6, 7, 11のように、キモノのもつ力への敬意の念を高め、自分も針と糸をもって小物を作ったり、ものづくりの精神を現代に生かそうと考えた生徒は、それぞれ、90%, 77.5%, 87.5%であった。男子生徒がほぼ半数いる中で、実際に布・針・糸を用いて、何かを作りたいと考えた生徒の割合が8割に近いというのは、評価してよいと思われる。

以上のように、表1は、今回の授業に対する生徒の興味は極めて大きいものであり、内容への理解も十分にできた、ということを示している。先述の生徒のワークシートに書かれた諸点が、アンケート結果と整合していることを特筆したい。

次に、図2に示したところの授業前・後のキモノに関するイメージや、日本の近代化への貢献並びに海外への影響力に関する知識の変化について見てみたい。各質問項目について、事前と事後の棒グラフが示しているように、事前と比べて授業後は、キモノのイメージと知識がともに大幅に向上している。「強い肯定」に5点、「肯定」に4点、「中間」に3点、「否定」に2点、「強い否定」に1点を与える5件法で各項目について事前と事後の平均値を出し、対応のある2群の平均値の差の検定を行ったところ、20項目中、14項目において、次のように有意差が見られた。

- ・1%の危険率で有意差がある項目：質問1, 2, 3, 5, 6, 15, 16, 17, 18, 19, 20
- ・5%の危険率で有意差がある項目：質問4, 8, 10

以上のように、まずは、「親しみ感、好意、文化的価値の承認、未来への継承、美意識の表現、布を無駄にしない考え方、文様の美しさ、華やかさ」といった、キモノのイメージに関する項目において、授業後に有意な差が見られた。次いで、キモノが「西洋のドレスの構造を変えた、生糸や刺繍付絹製品が日本の近代化に貢献した、欧米がこの衣装に熱狂した時代があった」という歴史的・文化的知識に関して有意差が見られ、最後に「民族衣裳としてのキモノを誇らしく思う」という項目で有意差が認められた。

このように今回の授業は、日本の衣生活の伝統と文化を『実物衣装を通して海外との関係から再発見させる』ことに成功した。これを衣生活学習のモデルとして、各地の高校に普及させたいと考えている。

おわりに

本研究の成果は、これまでに明らかにしてきたとおりである。今後の課題であるが、今回のような文化的内容を中心とした学習においては、布を用いたイメージ表現活動の組込みが必須と考えられるので、機会を得て、この点について考究してみたい。

引用文献

- 1) 京都服飾文化研究財団『図録 モードのジャポニズム』, 1996.
- 2) 長崎巖監督『図録 Kimono Beauty』, 東京美術, 2013.
- 3) 柴静子『「染織の日本」の発見を主題とした衣生活学習を支援する調査と内外資料の収集,』『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部, 62号, 2013, pp.311-320.
- 4) 椎野秀聰・青山弦『S.SHOBHEY』, 椎野正兵衛商店, 2012, pp.2-3.